

悩み抜いてきた過去があるから、いま、「毎日が奇跡」と感じられる。

日立教会 梶山貴美子さん

梶山さんは、20年連れ添った夫から突然離婚を切り出された。浮気相手と結婚したいという。その上、義父母からはお前のせいとなじられるありさま。離婚を回避したい一心で明るく振舞っていたが、心の中は怒りや悔しさと張り裂けそうだった。そんなとき、実母と仲間のアドバイスを受け、「夫の好きにさせてあげよう」という思いに至る。それを告げると夫は「やり直したい」という。(いまさら)と困惑したが、さらに「いままでつらい思いをさせてごめん。俺が悪かった」と初めて聞く謝罪の言葉。わだかまりがとけ「再出発」を決意した。ところがいま、梶山さんの両乳房にはしこりがある。がんは全身に転移して治療の手立てがないのだが、落胆していない。それは、悩み抜いてきた過去が無駄ではなかったと実感でき、自分の命は両親や家族、仲間など多くの人に生かされている尊い命だと気づいたからだ。と。そして、医者か首をひねるほど元気に過ごしているいま、「毎日が奇跡」と感じている。



使命にめざめる

この八か月間、「八正道」の徳目をつずつとりあげてきました。そして今月は、「八正道」の最後に示された「正定」です。「正定」とは、心が常に仏の教えに安住していて、周囲の変化によつて動揺しないことと受けとめられています。

ところで、「八正道」の「正」という字は、「正」と「止」が組み合わさってできています。仏の教えの「正」といえば、もちろん「真理」であり「法」です。いわば「八正道」の各徳目は、いずれも私たちが「真理に止まる」ための実践であり、その基本となるのが初めにおかれた「正見」といえます。その意味でいえば、「八正道」のすべてを修めるのは荷が重いという人も、日々の暮らしのなかで、何かにつけ、ふと省みて「正見」に立ち返る習慣をつけることが大事なのだと思います。

仏さまのように、ものごとをありのままに見ること(正見)によつて、静寂で澄みきった心(正定)を得る——それは「あの人の苦しみを除いてあげたい」「この人が慈悲の心を得るお手伝いができたらいいな」といった、菩薩としての願いをもつて生きるといふことでもあるのです。

ただ、そのような誓願をもつに至る方法は、もちろん「正見」に限られません。「八正道」が八つの徳目に分けて示されているのも、「二人ひとりの個性にあった精進の仕方です」といふ、釈尊のあたたかな教えの示し方に違いないのです。